

タイの水上住宅 - その4 筏住宅の変容と住まい方 -

松田博幸*、大森豊裕*、小西正康**、信岡耕太郎**

The water housing in Thailand - in case of a way of habitation of the raft house -

Hiroyuki MATSUDA, Toyohiro OMORI, Masayasu KONISHI, Kotaro NOBUOKA

Synopsis

This paper describes the view of the inhabitant in a water city in Thailand by the field work and interviewing. This study clears three points: (1) the condition of water village, (2) the condition of water housing, (3) the living condition.

Key words: water housing, water village, raft house, living condition, Thailand

1. はじめに

人類は水と共に生きてきた。水は生物にとって多かれ少なかれ影響を及し、人類にとって、生きていくために必要な物である。狩猟時代ならば大きな川がなくとも、飲み水として必要な量の水さえ確保しておけば、困ることはなかった。しかし、次第に農耕を行うに従って大量の水が必要となってきた。この生活様式の変化のため、大きな川の流域に人が集まり、定着化した。狩猟文化から、農耕文化への移行である。また、移動型の住居生活から定着型の住居生活への変容でもある。

特に東南アジアの国々は水と関係が深い。東南アジアは、半島部と島嶼部とからなり、常に海や川、つまり水と共生してきた。東南アジアで水の神と呼ばれるナーガは、インド神話における大蛇ないし竜であり、東南アジアの様々な土着的神話と結びつき各地にその姿を残している。東南アジアの各地にはこの神話と結びついた信仰、儀礼、習慣があり、東南アジアの国々が水と共生してきたことがわかる。そのため、水と隣り合わせにあるいは水の上に住むことを受け入れなければならなかった。現在も残るブルネイの大水上居住群、マレーシア東岸・西

岸のフィッシャーマンズビレッジ、インドネシアの環濠都市、東南アジア各地の杭上住宅等多くの水上住宅が見られるのはそのためである。

その中でもタイは、祭や文学、舞踊、民俗、絵画、彫刻、建築、都市計画等のいずれの分野においても、水に関わるもの多数がその土台となっている。海に囲まれ、川が縦横に国内を流れているタイにとっては当然のことである。川が多くそのため治水作業が困難で洪水を招きやすく、土地が湿地帯であるところが多い。このような土地であれば、洪水の度に断絶する陸路に比べ、洪水の時にでも自由に移動できる水路が発達するのは当然であり、水に対処する技術を学びながら水と隣り合わせに、あるいは水の上に住むことは自然発生的なことである。

現在でも高床式住居は、典型的な住居形式とされているが、かつては水上住宅(水に浮かぶ住宅)も典型的な住居であった。こうした住宅が最も多く存在したのは18世紀末から今世紀初頭にかけてである。この柔軟性と可動性を兼ね備えた住宅は、効率の良さと計画性のなさが前提となっている。住宅の内部は陸上住宅と変わらない機能を備えているが、土地に定着していないという移動可

*近畿大学工学部建築学科

**近畿大学大学院工業技術研究科建築学専攻

Department of Architecture, School of Engineering, Kinki University

Program in Architecture, Graduate School of Industrial Technology, Kinki University

能な自由さがある。交通網の中心が川や運河だった時代には、それが合理的かつ安全な居住形態であった。その上、1860年代頃のコレラの発生のため、天然のよりよい衛生システムという理由で、川沿いに家を建てていたのを、国王によって川そのものの上に建てるように命令された。

しかし、1957年に道路が一般に公開されたのを皮切りに、1887年には市電、1890年には鉄道が導入され、1980年代にいたっては高層ビルのラッシュとなった。これにより、完全に水路中心の生活から陸路中心の生活へと移行していった。

水と共生した生活に適していると言われる水上住宅も、このような交通手段の変化のためではなく、様々な要因が絡み合って減少してきた。建築材料の変化、ゴミの増加による水の自浄能力の限界、それが原因の水環境の悪化等多数の問題が絡み合っている。

このような理由により、減少の一途をたどっている水上住宅は、伝統的な生活習慣から近代的な生活習慣に移行する場合に起こりうる問題を内包している。この視点から水上住宅を見ることにより、伝統的な生活習慣を考慮に入れた住居改善と、近代化の方策を検討することは重要である。

本論は、タイのピサヌローク中心部を流れるナン川から東に約10km離れたところにある Kok Pho を対象地域として、そこに存在する筏住宅から移住した陸上居住について現状や特徴、および居住者の住まい方・意識を明らかにすることを目的としている。

2. 筏移住住宅の地域的特性

2.1 調査概要

- ①調査地域：図1に示すピサヌローク中心部を流れるナン川より約10km東に位置する Kok(コック・ポー) 地域
- ②調査対象：Kokchang の陸上住宅（6件）
- ③住宅調査：マッピング、観察調査、実測調査
- ④居住者調査：ヒアリング調査
- ⑤調査期間：2003年8月16日～8月18日

2.2 調査地域概要

調査地域には30～40軒近くの住宅が建ち並んでいる。全ての住宅が RC 造で建てられており、それほど年式は経っておらず最近建てられた住宅ばかりだった。中には新築、建設中の集合住宅(写真3. 2. 43参照)も多く見られた。それらの住宅の中には商店を営んでいるところがあり、地域住民はそれをよく利用している。今回は調査地域内の6軒の住宅の調査を行った。まず集落の特徴としては、調査地域内の通路は幅5mから7m程でまっすぐに整備され、自動車やバイクが容易に行き来でき、昼時になるとよく周辺地域から自転車やバイクの屋台が訪れる。

主食よりはむしろ軽食の屋台販売が主で、焼き鳥、アイスクリーム、地方独自の菓子などの販売があった。これらの食べ物はヒアリングの結果、調査を行った全ての住宅の住民が「食材を店で購入して家で調理して食べる」ということから、軽食として食べられると考えられる。調査住宅のすぐ側には広い公園があり、バスケットボール、サッカー、バドミントンなどの出来るコート、用具が完備されているほか、幼児でも遊べるように、幼児向け遊具も整えられている。また、集落地域の横に幅7m程の運河があるが、集落地域全ての住宅に水道が完備されていることや、軽トラックでの飲料水の販売(写真3. 2. 44参照)が訪れるおかげで、利用されることはほとんどない。川の対岸側は多くの草木が茂っており全くの未開発であった。また、対岸に行き来できる栈橋はなく、普段地域住民は行き来することはほとんどない。

調査地域の周辺は大きな幹線道路が通っており、アンケート結果より住民の多くはバス等の公共交通機関を利用していることから交通網も発展している。また、その大きな幹線道路沿いには大型スーパーマーケットや医療施設、飲食店などが建ち並んでおり、それらには大型駐車場が整備されており、多くの自動車が駐車しているのが見られた。地域住民はそれらを最大限利用している。

調査地域はピサヌローク市の中心街から離れた地域ではあったが、道路は整備され、交通網は発達しており、地域住民は容易に利用し移動することが可能である。また調査地域の周辺には多くの商店が立ち並んでおり、生活するには全く不便を感じることはない。その上、大きな幹線道路の外れにある地域なので、自動車やバイクの往来はなく、それらの騒音は全く感じられない。周辺には多くの自然があり、のどかで、多くの便利な設備が整えられおり、子供から老人まで快適に生活することができる環境だということが明らかになった。

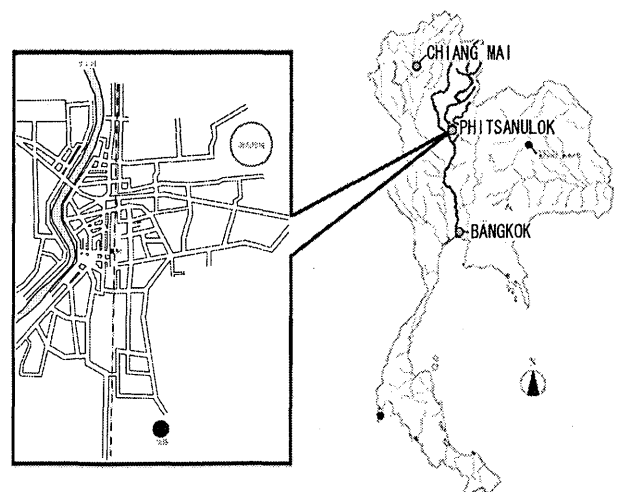


図1 調査対象地域

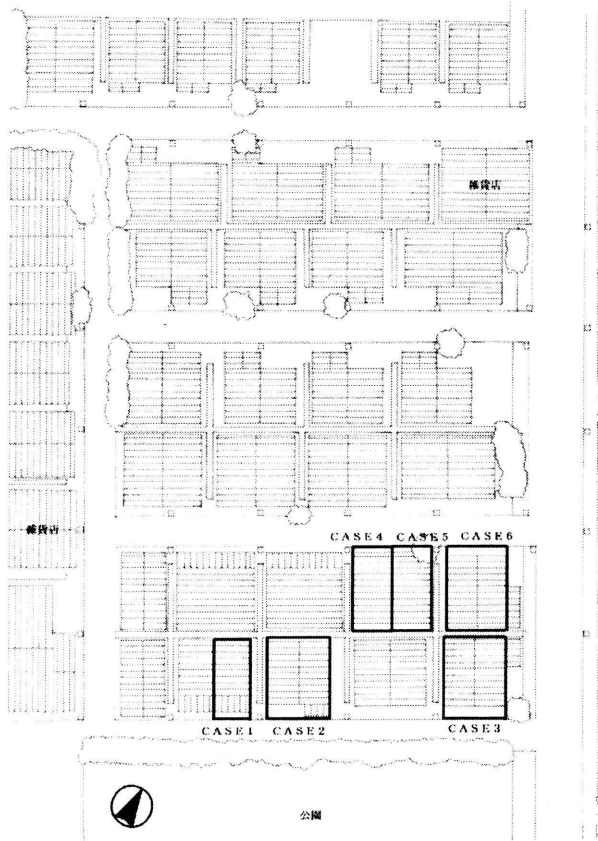


図2 集落構成図

3. 住宅の様態

①住宅の外観

家の前の道路から住宅全体を見ると、外壁が、白で統一されたRC造の住宅が存在しており、移住前の筏住宅を全く想像することはできない。

②屋根

すべての家が、傾斜の緩やかな切り妻形となっている。筏住宅の時に見られた、片流れ、伝統的なM型の屋根等は見られなくなっている。

③玄関周辺

道路から約2.5~3.5mほど入ったところに玄関がある。玄関の横には、ガレージや仕事場、休憩スペース等が存在する。この仕事場や休憩スペースは、屋根がトタンで、格子状の壁・木製の柱や床でできており、よく話を聞くと、筏住宅の一部を移住する時に持ってきて、利用しているとのことである。

玄関の扉は、鉄製や木製のものがある。中には、目線の位置ぐらいにガラスがはめ込まれているものもあり、外が見れる様になっているものや網戸が内側に張られて2重になっている扉もある。

③窓

網戸がはめ込まれており、木製の扉やルーバーも見ることができる。玄関や窓は、いつも開け放たれ、風を取り込もうとしていたがやはり川辺とは違い風が通る様子はなく、家の中は熱気が漂っていた。その為か、扇風機の数が多く見られ、常に扇風機を回している。

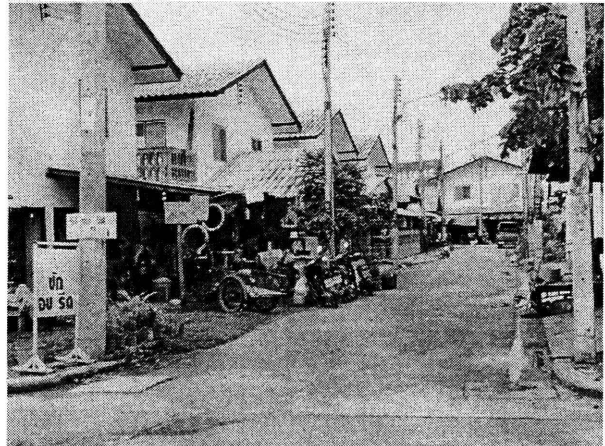


写真1 住宅群外観



写真2 玄関付近

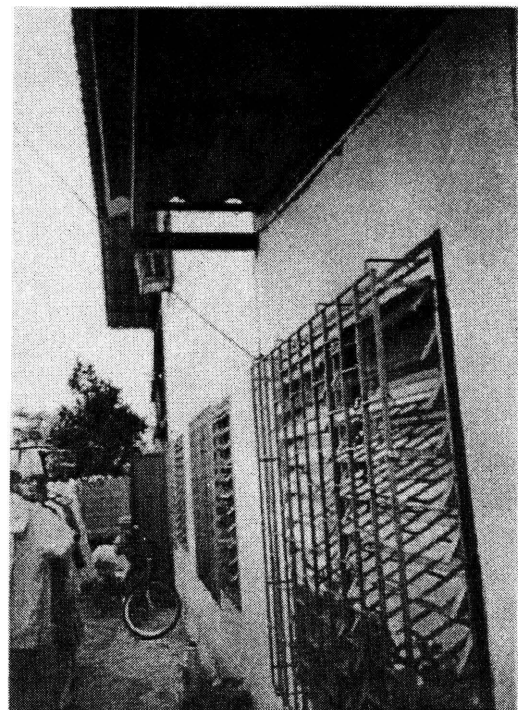


写真3 窓

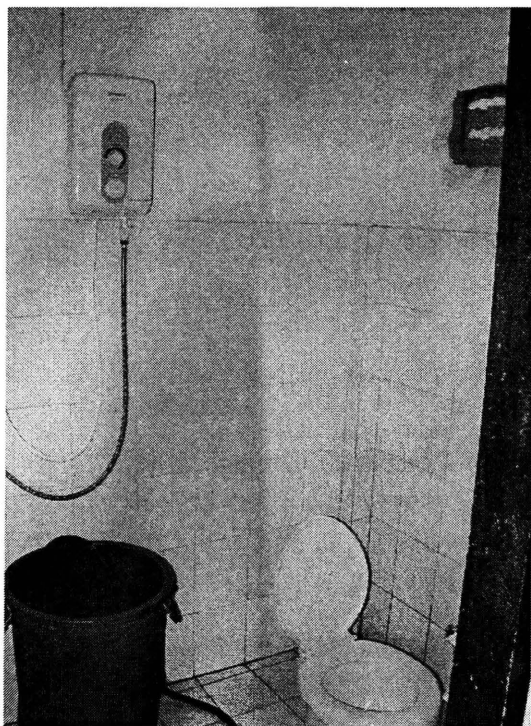


写真4 トイレ



写真6 天井



写真7 居間

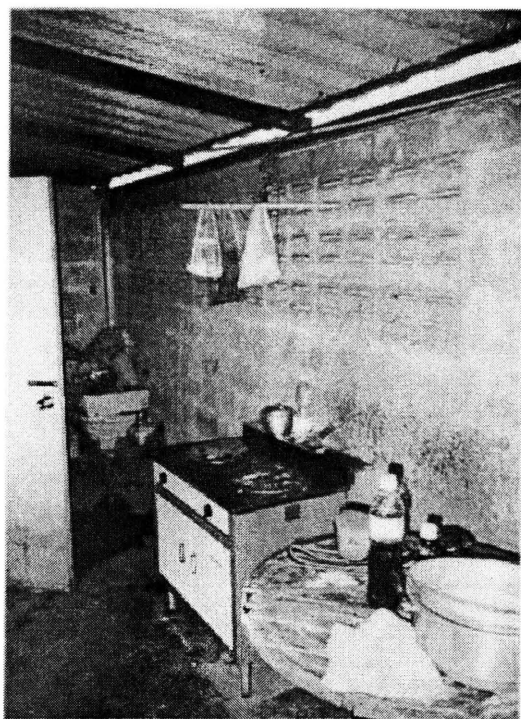


写真5 台所

④床

コンクリート打ち放しに絨毯やゴザ等を敷いている家が多く、中には、タイルや石が貼り付けられている家も見られ、住宅によって多少の違いが見られた。

⑥天井・壁・骨組み

壁は仕上げ剤が塗ってあり白で統一してある住宅がほ

とんどだったが、中には、壁紙が張られている家も見られた。RC造で日本と何ら変わりがなかった。

⑦トイレ

トイレ兼浴室は、すべての家で一階にしかなく、コンクリート壁と扉で仕切られており、便器があり、水瓶や水槽、ドラム缶等をおいている住宅が多い。

床や棚の上には、シャンプーや石けんも見られた。調査した6件中2軒の家で、隣り合わせにトイレが二つ並んでいる住宅も見られた。

すべての住宅において、トイレ兼浴室は、住宅の一番奥まった所にあり、居間に後付けされた感があり、他の部屋よりもつくりが粗末で、屋根はトタン・壁は木製の格子状のものもあり、筏住宅をそのまま持ってきているものも見られた。

⑧台所

どの住宅についても、台所は、居間の奥にあり、トイレと並ぶようにしてつくられており、台所の一角にトイレがあるといった感じになっている。居間や寝室がある母屋に、後付けされた感がある。台所には、勝手口が設けられており、直接外に出られるようになっている。

勝手口を出たところには、洗濯物を干すためのスペースがあり家事を行いやすくなっている。

⑨間仕切り

部屋と部屋との間仕切りは、ほとんどが壁が間仕切りとなっていたが、2階部分は、家具やカーテンを間仕切りの代わりとして使い一つの部屋を部屋を分けている家も見られた。

4. 居住実態

①家族構成

陸上住宅に住んでいる家族は、4人～5人の家族が多い。中には、親族同士共同で住んでいて10人という大家族も見られた。仕事は会社員や公務員や銀行員、自営業といろいろあり、家からバイクや車で10分～20分の仕事場に通っている。タイの1世帯平均月収は12,167Bt(約36,500円)と比較して、調査住宅平均月収は16,433Bt(約49,300円)であった。これは、タイ1世帯平均月収の約135%に相当し、比較的裕福な暮らしをしていることがわかる事が分かる。

②食事

食事は、1日3食お店から材料を買ってきて、家で調理して食べる事が多く、すでに調理済みのものを買ってきて食べている家も見られた。また、外食はほとんどの家でしておらず、外食をする家は月に3回～4回程度。

食事は台所で作っており、料理には、水道水を煮沸して使っている。調理道具は、炊飯器、ガスコンロ、冷蔵庫などの電気製品を使って作られる。食事は、家族が集まる場所(居間)で食べている。椅子やテーブルなどに座って食べている。居間などには、テレビやステレオ、ビデオデッキなどの電化製品が充実していた。

③飲料水

飲料水については、水道水を直接飲むことはなく、購入水を飲んでいる。理由としては、水道水は塩素消毒が

きついため、臭いもし、直接飲むと体に悪影響を及ぼしそうだからという理由が多かった。調理時については、水道水を使用する家も一部見られたが、ほとんどの家で購入水を使用している。

③皿洗い

食事後の皿洗いについては、水道水を使い、台所にあるシンクで行っていたり、家の外で洗っている家も見られる。

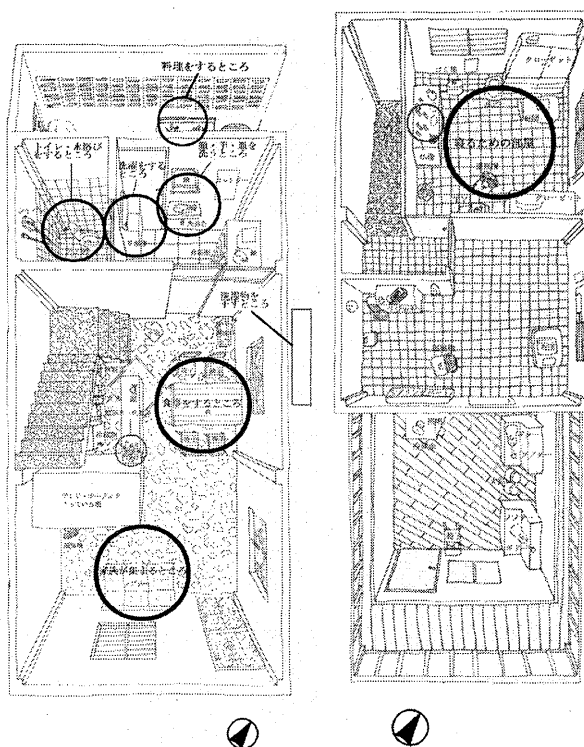


図3 生活行動図(左:一階, 右:二階)

表1 水上住宅における住まい方の実態

世帯	人数	一件目	二件目	三件目	四件目	五件目	六件目
	3人	10人	5人	4人	4人	6人	6人
	世帯主の職業	自営業(工場経営)	装飾品、土産物を作っている	主婦	公務員	銀行員	警備員
	月収	15000Bt	13500Bt	11100Bt	23000Bt	30000Bt	6000Bt
	年数	5年	5年	3年	4年	1年	3年
	費用	17万Bt	13万5000Bt	13万Bt	13万5000Bt	23万Bt	23万Bt
	面積	約80m ²	約128m ²	約123m ²	約57m ²	約87m ²	約68m ²
	建築材料	RC、ガラス、トタン	RC、ガラス、トタン	RC、ガラス、トタン	RC、ガラス、トタン	RC、ガラス、トタン	RC、ガラス、トタン
住居意識	住居に満足している理由	川の水位が変化するので嫌い 頑丈で、不安のない生活が送れる 現在の住宅	今より涼しいが、川の水位が変化するので嫌い 水道は使えるし、交通の便も良いので満足している 現在の住宅	景色、空気は良い。川の水位が変化するので嫌い 交通の便が良い 現在の住宅	景色は良かったが、川の水位が変化するので嫌い 水道水は使えるし、交通の便がよいので満足している 現在の住宅	川の水位が変化するので嫌い 交通の便が良い 現在の住宅	涼しかったし、川の水がいつでも使えたので、好き 以前に比べ、家が大きいので、満足している 以前の住宅
	住居に不満を感じる理由	頑丈で、修理の必要がないから	修理しなくて良い不動産の価値もあるから	交通の便が良く、どこでもいける	便利だから	交通の便が非常に良かったから	涼しく、生活費も安く、川の水をいつでも使えたから
交通手段の変化	以前	ボート	ボート	ボート	ボート、自転車	ボート	ボート
	現在	バイク、車	バイク、車、公共交通機関	ミニバス、バイク、公共交通機関	公共交通機関、バイク	バイク、車、公共交通機関	バイク、車、公共交通機関
子供の遊び方の変化	理由	わからない	わからない	わからない	自転車や遊ぶようになった。 前は、家のそばで遊んでいたが、今は公園で遊んでいる	変化なし	おままごとや自転車、スノーボードなど近くにグラウンドがあるので、そこで遊んでいる
	理由	子供が小さく、まだ大人だったから	すでにみんな大人だったから	小さい子供がいないので	以前より更に、現住宅のつきあいが増えた。祖母がまだ水上住宅に住んでいるので	以前より更に、現住宅のつきあいが増えた。祖母がまだ水上住宅に住んでいるので	以前より更に、現住宅のつきあいが増えた。祖母がまだ水上住宅に住んでいるので
地域交流	移動前からの人間関係	変化していない。近所の人と一緒に移ってきたので水上住宅に残っている人とは、携帯で連絡しあっている	以前より更に、現住宅のつきあいが増えた。変化なし。	以前より更に、現住宅のつきあいが増えた。祖母がまだ水上住宅に住んでいるので	以前より更に、現住宅のつきあいが増えた。祖母がまだ水上住宅に住んでいるので	以前より更に、現住宅のつきあいが増えた。祖母がまだ水上住宅に住んでいるので	以前より更に、現住宅のつきあいが増えた。祖母がまだ水上住宅に住んでいるので

③洗濯

洗濯は、水道水を使い、台所に隣接しているところで行っている。洗剤を使い、水道水をタライに汲み、手揉み洗いをしている家もあれば、洗濯機を使って洗濯している家もある。洗濯した衣類は、日当たりの良い家の横や家の前でロープに吊したり、洗濯竿にかけて干している。乾いた衣類は、住宅内にある洋服タンスや窓にハンガーを用いて吊してある。

④トイレ・水浴び

トイレ兼浴室は、すべての家で一階にしかなく、コンクリート壁と扉で仕切られており、便器があり、水瓶や水槽、ドラム缶等をおいている住宅が多い。トイレトーパーはなく、トイレに置いてある柄杓でためてある水を使ってお尻を拭いている。水浴びは、シャワーや柄杓を使いトイレで行っている。水道水を使い、シャンプーや石鹸で体を洗っている。

⑤光熱費

光熱費は、水上住宅時よりもどの家も大幅に増えていた。この理由としては、電化製品、特に洗濯機を購入したことや、今までは、調理するときに炭を使っていたが、ガスコンロを使用するようになったからという理由が大半を占めていた。

⑥就寝

就寝は、布団やベットで寝ている。寝室は、住宅の二階に二・三部屋あり、個人個人別々に寝ている家が多く見られた。

⑦交通手段

外出する時の交通手段は、車・バイクや公共交通を用いている。

ボートを所有していた家族は、陸上に移住するときに、知り合いに安い値段で売ったり、譲ったりして処分している。筏住宅に住んでいる時は、バイクを持っている家はあったが、車を持っている家は見られなかった。この様なことから、陸上住宅に移ることによってモーターゼシヨンの進展が伺える。

5. おわりに

以上のように、一部ではあるが、筏住宅から陸上住宅に移行した人の住居・居住の実態について一定の知見が得ることができた。

ピサヌロークでは、筏住宅から陸上住宅に移住したことによって、急激に近代的な生活にシフトし、適応して非常に生活や住環境は向上し満足そうにしている。そうした中でも、筏住宅から移住する時に、解体したものを持ってきて、仕事場や玄関前の休憩スペース、台所といったところに再利用しており、愛着やこだわり等を見ることができ、近代的住宅に伝統的住宅の面影を見ることができた。また、住宅が鉄筋コンクリート造になったために昼間は、暑く常に扇風機を回していなければならないので、住みにくいという問題点や洗濯機やガスコンロ等

の充実により、光熱費がかさむといった問題も出てきている。

この様に、筏住宅へのこだわりや、愛着、近代的な生活や住宅に移行したことによって生じている問題、伝統的な技術、知恵、生活習慣、パナキュラー住宅の維持保全といった面から考えて、近代的な生活と伝統的な生活、近代的住宅と伝統的住宅の両面の良さを兼ね備える事が必要となってくる。

今後の課題として、以下が挙げられる。

ピサヌロークでは、筏住宅から陸上住宅に移住したことによって、住宅の形態や住まい方が急激に近代化していることが伺える一方で、伝統的な生活、知恵や技術といったものが見られなくなっている所や近代的な住宅に上手に対応している点などが見られた。

住宅の形態の変化を見てみると、周辺環境では、共有スペースとして、住宅のすぐ近くに、バスケットやハンドボール等ができる公園がある。また、幼児も遊べる用に砂場や遊具も見られた。近くには、幹線道路が通っているため、交通の便や、商店等へのアクセスもよくなっており、住環境の改善が見られる。

部屋数の増加、建築面積の増加により趣味の部屋があったり、個々のプライバシーの確保ができるようになり、住環境が改善されている。

電化製品を見てみると、洗濯時は、今までは、大半が手もみ洗いだったのに対し、全ての家で洗濯機の導入、調理時に置いても、以前は、七厘の所もあったが全ての家で、ガスコンロが普及していた。

一見近代的住宅に移行したことによって、生活が向上して満足しているかと思えば、様々な問題も浮かび上がってくる。

筏住宅では、川沿いで風が吹きやすく、また、住宅の至る所に風を取り込む工夫がしてあったために、比較的涼しく過ごす事が出来ていたのに対して、現在の住宅では、涼しくすむための多少の工夫は見られるが、鉄筋コンクリート造のために昼間は、暑く常に扇風機を回していなければならないので、住みにくいという問題点や洗濯機やガスコンロ等の充実により、光熱費がかさむといった問題、以前は、いつでも、すぐに川の水を使えたので、便利だったといった水上生活者ならではの意見も見られた。

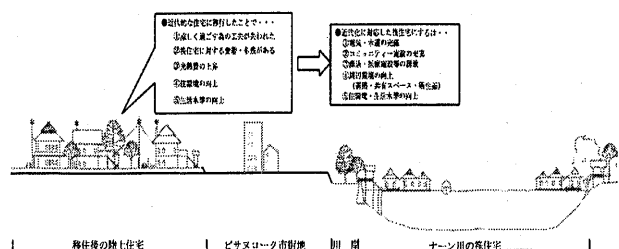


図4 近代化移行による問題点と改善




移住したことによる問題点と改善点		
●筏住宅（移住前）	●問題点と改善点	●陸上住宅（移住後）
<p>①住宅の形態</p> <ul style="list-style-type: none"> ・川岸にテラスや畑がある  ・栈橋を渡ってはいいる  ・木製の扉  ・切り妻・片流れ・伝統的なM型の屋根  ・板張りで、隙間があり風を通しやすい  ・梁がむき出しの天井  ・ガラスはなく、木の扉  ・便器のないところや壁等の仕切のないところもある  ・住宅維持（筏の交換）の為に2～3年周期で総額8,000～9000Bt必要 ・財産的価値がない ・平均3.2部屋 ・平均43.5m² ・水上だった為に洪水といった自然災害が起こり安全に生活できない 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の共有スペースができた ・筏住宅に対する名残や愛着がある ・玄関扉は前に比べ風を取り込む工夫がなされている ・伝統的屋根の消滅 ・床の隙間が無くなり風が入り込まない ・天井裏が見えなくなり見た目は良くなったが、風が入り込まない ・窓もルーバーや網戸を付けるようになり上手く近代化された ・住環境の向上 ・住宅維持費の軽減 ・財産価値の発生 ・部屋数、建築面積の増加により、住環境の向上 ・住宅の安全性の確保 	<ul style="list-style-type: none"> ・整備された公園がある  ・仕事場・休憩スペースがある。  ・内側に網戸や鉄柵があり二重扉である。  ・傾斜の緩い切り妻  ・コンクリートの床で、タイルや石が貼ってある  ・化粧板があり構造は見えない  ・ルーバー窓や木の扉、内側には網戸の二重扉  ・便器があり、水浴び用のシャワーもある  ・今のところ住宅維持の費用はいらない ・土地+建物の財産的価値ができる ・平均5.3部屋 ・平均90.6m² ・天候に左右されず安心して暮らせる

図5 移住による問題点と改善1

移住したことによる問題点と改善点

●筏住宅（移住前）	●問題点と改善点	●陸上住宅（移住後）
<p>②居住実態</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一世帯平均3.69人 ・一世帯平均収入6,084円 ・川に関する仕事をする人も見られた  <ul style="list-style-type: none"> ・交通の便が良くない ・布団を敷いて寝る  <ul style="list-style-type: none"> ・調理時七厘を用いている家もある  <ul style="list-style-type: none"> ・半数の家が、手もみ洗い  <ul style="list-style-type: none"> ・洗濯、皿洗い等で川の水を利用する ・電化製品はある程度充実している ・光熱費 ・筏住宅周辺のつきあい ・川沿いで風が吹きやすく至る所に風を取り込む工夫がしてあるので、涼しく過ごせる 	<ul style="list-style-type: none"> ・住環境の改善と生活の向上が伺える ・利便性の良さが見られる ・生活の変化が伺える ・七厘からガスコンロにエネルギー変化している ・手もみ洗いから洗濯機に生活の向上が伺える ・電化製品の充実、エネルギー変化による光熱費の上昇の問題 ・移動したことによってつきあいの範囲が広がる ・涼しく過ごすための伝統的な工夫がなくなっているところや逆にうまく近代的住宅に移行している点も見られる 	<ul style="list-style-type: none"> ・一世帯平均5.3人 ・一世帯平均収入16,084円 ・川に関する仕事をする人が見られなくなる ・近くに大きな道路や店がありアクセスしやすい ・大半がベッドで寝る  <ul style="list-style-type: none"> ・全ての家がガスコンロ ・全ての家が洗濯機 ・飲料水以外は水道水を使用 ・全ての家でガスコンロ・洗濯機等の電化製品がさらに充実 ・洗濯機・ガスコンロ等の電化製品の利用による光熱費の増加  <ul style="list-style-type: none"> ・現住宅と筏住宅の両方の人とつきあっている。実際に筏住宅に行ったり、携帯電話で連絡を取ったりする ・涼しく過ごすための多少の工夫は見られるが、RC造のため昼間は暑くて、過ごしにくい 

図6 移住による問題点と改善2

筏住宅へのこだわりや、愛着、近代的な生活や住宅に移行したことによって生じている問題、伝統的な技術、知恵、生活習慣、バナキュラー住宅の維持保全といった面から考えて、近代的な生活と伝統的な生活、近代的住宅と伝統的な住宅の両面の良さを兼ね備える事が必要となってくる。

最後に、元近畿大学工学部建築学科の金子佳弘君、藤村佳史君、宮下洋輔君の名前を記して謝意を表します。なお、本研究は、日本學術振興会平成15年度科学研究費補助金の助成を受けている。

●参考・引用文献

- ・日本建築学会 「建築設計資料集成2」 (株)丸善 1960
- ・William Warren 「THE HOUSE ON THE KLONG」 1968
- ・LUCA INVERNIZZI TETTONI, WILLIAM WARREN 「THAI STYLE」 ASIA BOOKS 1988
- ・石井米雄、吉川利治 「タイの事典」 同朋舎出版 1993
- ・スメート・ジウムサイ、西村幸夫 「水の神ナーガ アジアの水辺空間と文化」 鹿島出版会 1994
- ・松下正弘 「タイ文化ハンドブッカー道標微笑の国へ」 勁草書房 1995
- ・Professor Rear Admiral Sompop Piromya R.T.N 「THAI HOUSES」 THE MUTUAL FUND PUBLIC COMPANY LIMITED 1995
- ・Steve Van Beek 「THE CHO PHYA River in Transition」 OXFORD UNIVERSITY PRESS 1995
- ・寒川直紀、米田忍 「タイの水上居住に関する研究」 近畿大学工学部卒業論文 1996
- ・亀井大介、佐野こずえ、三原聡 「タイ・ピサヌロークの水上居住に関する研究」 近畿大学工学部卒業論文 1997
- ・安圖圭司、杉村浩、柳野智宏 「タイの水上利用に関する研究」 近畿大学工学部卒業論文 1998
- ・石田直樹、中川勝統、和久田弥 「タイの運河沿い住宅の様態に関する研究」 近畿大学工学部卒業論文 1999
- ・佐藤真理子 「ワールドガイド`99~`00 タイ」 JTB 1999
- ・蛭田康裕、増成健治、吉田明展 「タイの地域型住宅に関する研究」 近畿大学工学部・卒業論文 2000
- ・石谷一成 「地球の歩き方 やすらかなる国 タイ`01~`02」 ダイヤモンド・ビッグ社 2001
- ・松岡伸浩、安藤祐樹、境久美子、中川幸子 「水上住宅の様態と居住実態に関する研究 —タイ・ピサヌローク—」 近畿大学工学部 卒業論文 2002
- ・大坂孝臣、権現智士 「タイの水上居住に関する研究 —バンコク・杭上住宅」 近畿大学工学部 卒業論文 2003
- ・松田博幸、大森豊裕、川口茂博、小西正康 「タイの水上住宅 —その2 杭上住宅1—」 日本建築学会 中国支部研究報告集 第26巻 pp901-904 2003
- ・松田博幸、大森豊裕、川口茂博、小西正康 「タイの水上住宅 —その3 杭上住宅2—」 日本建築学会 中国支部研究報告集 第26巻 pp905-908 2003
- ・松田博幸、大森豊裕、川口茂博、小西正康、信岡耕太郎 「タイ・バンコクの杭上住宅の様態と住まい方」 日本建築学会 中国支部研究報告集 第27巻 pp849-852 2004
- ・松田博幸、大森豊裕、川口茂博、小西正康、信岡耕太郎 「タイ・ピサヌロークの筏住宅の変容と住まい方」 日本建築学会 中国支部研究報告集 第27巻 pp853-856 2004